



Title	『平家物語』における成親像の形成-鹿谷事件との関連をめぐって-
Author(s)	金, 任仲
Citation	文学研究論集(文学・史学・地理学), 6: (184)-(172)
URL	http://hdl.handle.net/10291/7352
Rights	
Issue Date	1997-02-28
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

『平家物語』における成親像の形成

— 鹿谷事件との関連をめぐって —

A Study of the Formation of Naritika from the HEIKEMONOGATARI

博士後期課程 日本文学専攻 一九九五年度入学

金 任 仲

Imjung Kim

はじめに

『平家物語』が、平家一門の没落を描いていく過程のなかで、その没落の直接・間接の契機となるものとして大きく取り上げている事件を挙げるとしたら、巻第一の「鹿の谷の陰謀」、巻第四の「高倉宮挙兵」、巻第六の「頼朝挙兵」を挙げることができるのである。この三つの事件はその発端や過程及び結果はそれぞれ違っているものの、いずれも反平家の性格を持っているものであり、しかもその内容において段階的な意味合いをもっているという点で興味深いことである。つまり各事件の首謀者に関して言えば、「鹿の谷の陰謀」が藤原成親等の院の近親、「高倉宮挙兵」が源氏の傍流頼政、「頼朝挙兵」が源氏の嫡流頼朝というふうに、またそれぞれの内容

も「鹿の谷の陰謀」が何の軍事行動もできずに未然に露見してしまったのに対し、「高倉宮挙兵」の時はいくらかの合戦が行われ、「頼朝挙兵」で以てついに平家を没落に至らしめるという具合に、反平家の気運がしだいに拡散していくのである。勿論これらの事件そのものは歴史的な事実には則つたものであり、当時の日本の社会を揺るがした大事件であつたことは、当時の貴族の日記などを見ても分るのであるが、このように次第にエスカレートしていく反平家の動きを語ることは、その反面に徐々に没落していく平家一門の様子を伝えるには大変効果的であつたろう。

そのなかでも「鹿谷事件」は『平家物語』における最初の反平家の動きとして、平家の没落の過程を描くという点で考える時、治承四年（一一八〇）八月の頼朝挙兵による源平合戦という大争乱の、

最も大きな引きがねとしてこの事件を位置づけたものようである。

本稿では、作品の分析を通して「鹿谷事件」に対する作者の評価と、成親との関連をめぐって考えてみることにしよう。

一

先ず『平家物語』に描かれている「鹿谷事件」までの展開をざっと見てみると、序に当たる「祇園精舎」でまだ昇殿を許されぬ下級武家としての平家の系図を述べた上で、次の「殿上闇討」で忠盛の昇殿を語り、以下「鬪」「禿髮」「祇王」で清盛をはじめとした平家一門の繁栄ぶりを、続いて「二代后」「額打論」「清水寺炎上」では朝廷・山門等を通してみだ当時の社会の秩序の紊乱状態を述べている。そして次の「東宮立」に至っては、高倉天皇の即位によっていよいよ平家が皇室の外戚となり、なかでも建春門院の御兄の時忠は「入道相国天下の大小事をのたまひあはせられければ、時の人平関白とぞ申ける」と、平家の繁栄を「平関白」という言葉で締め括っているのである。それから話は「是こそ平家の悪行のはじめ」と言われる「殿下乗合」に移るわけであるが、これも結局のところ摂政をも眼中に置かない傍若無人ぶりを語るることによって当時の権力者としての平家を描くという点においては、以前の章段の延長線上にあるものと見てもよいであろう。

さて『平家物語』によれば、「鹿の谷」の平家打倒の陰謀は左大将

の職をめぐる藤原成親の不满がその直接の原因になっているが、それに先だつて『平家物語』は院の庁と平家との間の軋轢を事件の背景として伝えられている。政界における軋轢は常に官位官職をめぐって展開するわけであるが、『平家物語』は院の近臣たちに対しても次のように厳しく批判している。

さるほどに、嘉応元年七月十六日、一院御出家あり。御出家の後も万機の政をきこしめされしあひだ、院内わく方なし。院中にちかくめしつかはる、公卿殿上人、上下の北面にいたるまで、官位捧禄皆身にあまる斗なり。されども人の心のならひなれば、猶あきだらで、「あ(ッ)ばれ、其人のほろびたらば其国はあきらむ。其人うせたらば其官にはなりなむ」な(ン)ど、うとからぬどちらによりあひあひさ、やきあへり。

(巻第一・殿下乗合)

平家にも劣らず、院の近臣たちも「身にあまる」ほどの「官位捧禄」をもらっていたこと、またそれにも満足せず常により高い地位に執着を見せていることを示しているのである。院庁のこうした雰囲気、やがて起こる「鹿の谷」の陰謀事件の直接の契機になる左大将の職に対する成親の恐ろしいほどの執着の伏線となっているのは言うまでもない。

保元・平治の乱を通じてお互いの必要に応じて結ばれていた後白河院と清盛の関係は、崇徳院・源義朝というそれぞれの政敵が朝廷

から完全に除去されてしまつてからは続く意味を失い、今度は院庁と平家が朝廷の実権をめぐつて対立する両大派閥として登場したわけである。そしてこの両勢力の政権争奪戦は一応平家の方が実権を握る。しかし政権欲の強かつた後白河院がこれを快く思うはずはなく、打倒平家の機会を虎視眈々伺つていたのは充分に推測できる。『平家物語』の次のような記述をみても、当時の院庁のこうした雰囲気をよく語っている。

法皇内々仰なりけるは、「昔より代々の朝敵をたいらぐる者おほしといへども、いまだ加様の事なし。貞盛・秀郷が将門をうち、頼義が貞任・宗任をほろぼし、義家が武衡・家衡をせめたりしも、勸賞おこなはれし事、受領にはすぎざりき。清盛がかく心のまゝ、にふるまうこそしかるべからね。是も世末になつて王法のつきぬる故なり」と仰なりけれども、つゝでなければ御いましめなし。

(巻第一・殿下乗合)

「鹿の谷」の平家打倒の陰謀は、このように院庁の空気の中かで成親をはじめとした院の近臣たちによつて―首謀者は確かに後白河院であつたらう―なされたものである。

先述したとおり、『平家物語』は事件の発端を、新大納言成親の左大将の職を所望したがかえられなかつたことに対する不満に求められている。作品によると高倉天皇の元服が行われ清盛の娘の徳子が女

御として入内した「其比」内大臣兼左大将であつた師長が左大将を辞任し、その大将の職を当時の徳大寺の大納言実定、花山院の中納言兼雅、新大納言成親の三人が所望したという。なかでも成親は法皇の寵愛を頼りにして、石清水八幡宮に百人の僧をこもらせて大般若経百卷を真読させたり、夜な夜な自ら歩行で賀茂別雷神社へ参詣したり、またその神社にある聖をこもらせて拏吉尼の法を百日行わせたりするなど異常な程の執着ぶりを見せていた。しかしながらこれらの祈願行動に対する運命の予徴は悉く不吉な形で成親の前に現れる。つまり石清水八幡宮の場合は「八幡大菩薩の第一の仕者」とみなされている鳩が三羽飛んできて互いに食いあつて死ぬ異変が起こり、それを神祇官に占わせたところ「天下のさはぎ」但、君のつゝしみに非ず、臣下のつゝしみ」と判明され、上賀茂神社参詣の場合は、本人の夢のなかで「ゆゝしくけだかけなる御声」の「さくら花かもの河風うらむなよちるをばえこそとゞめざりけれ」という告げを得、また同神社に聖をこもらせたことに対しては、その聖が壇を設けている洞の傍の杉の大木に雷が落ちるなどのことがそれぞれある。作者がこのような数々の異変を、

神非礼を享給はずと申に、此の大納言非分の大将を祈申されければにや、かゝるふしぎもいできにけり。

(巻第一・鹿谷)

と解釈している。すなわち成親が大将を所望したこと自体を神に

対する「非礼」、また自分に対する「非分」といつているわけである。つまりこのことは成親には大将になる資格などないのだということに言い換えることができるのであり、それはすぐ後に続く実定に関する言及「中にも徳大寺殿は一の大納言にて、花族栄耀、才学雄長、家嫡にてまし、けるが、越られ給けるこそ遺恨なれ」との対照を通してよりはっきりと現れているのである。

ところで左大将の職をめぐる実定、兼雅、成親の三人の所望にもかわからず、事態は意外な方向に展開していく。清盛の嫡男重盛が右大将から左に移り、次男宗盛が右大将になったのである。これに対して作者も「其比叙位叙目と申は、院内の御ばかりひにも非ず、撰政関白の御成敗にも及ばず、只一向平家のまゝにてありしかば、(中略)申斗もなかりしか」と批判的な態度をとっているが、当の成親も「徳大寺・花山院に越られたらむはいかゞせむ。平家の次男に越らるゝこそやすからね。是も万づおもふさまなるがいたす所なり。いかにもして平家をほろほし、本望をとげむ」と打倒平家の決意をするに至るのである。しかしこのような成親の決意に対しても作者はあくまでも批判的である。

父の卿は中納言までこそいたられしか、其末子にて位正二位、官大納言にあり、大国あまた給は(ツ)て、子息所従朝恩にほこれり。何の不足にかゝる心つかれけむ。是偏に天魔の所為とぞみえし。平治には越後中将とて、信頼卿に同心のあひだ、既に誅せらるべかりしを、小松殿やうゝに申て頸をつぎ給へり。

しかるに其恩をわすれて、外人もなき所に兵員をとゝのへ、軍兵をかたらひをき、其営みの外は他事なし。

(巻第一・鹿谷)

ここで作者が成親を非難している理由は二つの点にある。まず一つは、「何の不足にかゝる心つかれけむ」という記述からも分るように、成親が現実には満足することを知らず身に余る欲を出したことである。これは先程引用した院の近臣たちの官位への強い執着ぶりを述べたところでの「されども人の心のならひなれば、猶あきたらで」という記述と、成親の様々な祈願を評したところでの「非分」という言葉と一脈相通するものである。もう一つは、平治の乱(一一五九年)の時、小松殿によって命をたすけてもらった恩を知らないということである。

ここまではとりあえず、「鹿の谷」の陰謀事件の背景と発端について見てきたが、以上を総括してみると、『平家物語』の作者は「鹿谷事件」を院の近臣たちの権力に対する度を越す執着が引き起こしたものととして解釈しており、成親はその典型的な人物として描かれ、また批判されているのである。

二

「鹿の谷」の平家打倒の陰謀が企てられたその謀議の場として用いられたのは、「東山のふもと鹿の谷」にあった法勝寺の執行俊寛僧

都の山庄である。この密議の子細について『平家物語』はあまり語らうとはしない。「かれにつねはよりあひ、平家をほろぼさむずるはかりことをぞ廻らしける」という記述でさつと片づけているのである。作者がその内容をつかみにくかったことは、その密議が言葉とおり「密議」であり、史料でも詳細に触れているものがないことから容易に推測できることである。作者がここでこのような書き方をしたのは、密議の内容に対する無知のためというよりは、むしろその原因を求めるところに関心があったと思われる。つまり、作者の関心は謀議そのものよりも後に展開される酒宴の様子にあったということである。ここでその酒宴の様子を見てみる。

或時法皇も御幸なる。故少納言入道信西が子息、浄憲法印御供仕る。其夜の酒宴に、此由を浄憲法印に仰あはせられければ、「あなあさまし。人あまた承候ぬ。只今もれきこえて、天下の大事に及候なむず」と、大にさはぎ申ければ①新大納言けしきはりて、さ(ッ)とた、れるが、御前に候ける瓶子をかり衣の袖にかけて引たうされたりけるを、法皇「あれはいかに」と仰ければ②大納言立かへりて、「平氏たはれ候ぬ」とぞ申されける。法皇まつばにいらせおはして、「者どもまい(ッ)て猿楽つかまつれ」と仰ければ、③平判官康頼まいりて、「あ、あまりに平氏のおほう候に、もて酔ひ候」と申。④俊寛僧都「さてそれをばいか、仕らむずる」と申されければ、⑤西光法師「頸をとるにはしかず」とて、瓶子のくびをと(ッ)てぞ入にける。浄憲

法印あまりのあさましさに、つやつや物も申さず、返々もおそろしかりし事どもなり。

(巻第一・鹿谷)

山庄での酒宴のあり様を法皇につき添って臨席した浄憲の目を通じて語っているわけであるが、この場面で浄憲を登場させた意味について考えてみる必要がある。

『平家物語』のなかで浄憲が登場するのは巻一の「鹿谷」、あとは巻三の「法印問答」と「法皇被流」の三つの章段に過ぎなく、一見して浄憲は作品においてそれほど大きな位置を占めていないように見える。しかしながら各章段における浄憲に関する記述を通じて見た時、浄憲にはどことなく重盛に相通じるイメージがあると思われる。というのは、まず浄憲は、法皇と清盛との間の橋渡しの人物であるという点において重盛と共通するイメージを持っている。重盛が法皇と清盛の両側から信頼された人物であり、「鹿谷事件」の事後処理をめぐって法皇幽閉を執行しようとする清盛を特有の雄弁でなだめた話はいまにも有名である(巻第二・「教訓状」烽火之沙汰)。浄憲も法皇の近臣でありながら清盛からも「御房は事あやまつなじき人」(巻第三・法皇被流)と言われるほど両側から信頼を受けていた人物である。延慶本・源平盛衰記では浄憲が法皇に対する憤懣で怒り狂う清盛を、「教訓状」や「烽火之沙汰」における重盛を思わせるような雄弁でなだめている。

また浄憲は、ある意味においては、運命の予言者として重盛と重

なる一面を有している。重盛の運命の予言者としての性格については、かつて石母田正氏の卓見があるが、実は浄憲もさりげなく平家の滅びの運命を見通しているのである。治承三年（一一七九）の清盛のクーデターにより法皇が鳥羽殿に幽閉された時、浄憲を訪ねて次のように語っている。

何事も限りある事で候へば、平家たのしみさかへて廿余年、され共悪行法に過て、既に亡び候なんぞ。（中略）しかれば政務は君の御代となり、凶徒は水の泡ときえうせ候べし。

（巻第三・法皇被流）

浄憲のこの言葉は幽閉された法皇に対する憐憫から出た単なる慰めの言葉としてだけとらえるべきではない。それをも含めて、「水の泡」という言葉が示しているように、平家の滅びの運命を予言した言葉として理解すべきであろう。

こうしてみると浄憲は、たとえ作品における比重に格段の差があるにせよ、重盛にきわめて近いイメージの存在として創り上げられていることが分る。重盛が法皇と清盛との間に立つことによつて両者の間の葛藤をより鮮明なものにし、そしてその結果として平家の没落の運命を浮き彫りにする役割を担当していたとした場合、勝手に想像をふくらましていうならば、その重盛がはやばやと姿を消した時点で、重盛の役割を受け継いで法皇と清盛、ひいては朝廷と平家との間の葛藤を具体化し、平家の没落の運命を再確認する存在と

して浄憲が造型されたとしてもそれほど誤りではなからう。

浄憲のこのようなイメージは作者によつて創り上げられたまつたくの虚構ではないようである。特に浄憲が院側と清盛側との橋渡し的な存在として両者から信頼されていたことは、たとえば次の「愚管抄」と延慶本の記述からも確認することができるのである。

東山辺ニ鹿谷ト云所ニ静賢法印トテ、法勝寺ノ前執行、信西ガ子ノ法師アリケルハ、蓮華王院ノ執行ニテ深クメシツカヒケル。萬ノ事思ヒ知テ引イリツ、マコトノ人ニテアリケレバ、コレヲ又院モ平相国モ用テ、物ナド云アハセケル。^⑤

（「愚管抄」）

其比静賢法印ト申ケル人ハ、故少納言信西ガ子息也。万事思知テ振舞人ニテ有ケレバ、平相国モ殊ニ用テ、世中ノ事共時々云合セラレケリ。法皇ノ御気色モヨクテ、蓮花王院執行ニモナサレナドシテ、天下ノ御政常ニ被仰合ケル。^⑥

（第一本・成親卿人々語テ鹿谷ニ寄会事）

要するに浄憲は、両方から重く「用いられて」よく相談相手になつた人物であり、その意味から当時の両者間の情勢を一番よく把握している人物ということができよう。作者はそのような浄憲を、「鹿の谷」の陰謀の場に参加させてその陰謀の無謀さと「あさましさ」を語ることによつて、「非分」の欲念のために身を滅ぼした成

親のあさましさを批判しているのである。

ところで、ここで注目したいのは酒宴の光景を語るにあたって諸本によって若干の異同が見られる。一つは法皇の御幸の有無、もう一つは傍線を引いたところのそれぞれの行為の主体である。まず前者については、四部合戦状本・源平盛衰記⁽²⁾ではともに法皇の御幸がなされておらず、したがって法皇の発言も浄憲の登場もないため延慶本や覚一本などの語り本系のような書き方は、当然でなかったであろう。また後者については、①のところを延慶本では語り本と同様に成親の行為としているが、四部合戦状本では「酒宴瓶子」に「と、源平盛衰記では風に倒れた笠に驚いた馬を鎮めようと舍人雑色が騒ぐなかで「酒宴の人々も少々座を立ちけるに、瓶子を直垂の袖に懸けて頸をぞ打折りてける」というふうに行為の主体がはっきりしていない。また②に関しては、四部合戦状本が康頼としているのに対して他本は皆成親となっている。③のところは四部合戦状本は欠、他本は皆康頼。④のところは四部合戦状本、長門本、源平盛衰記ともに欠、延慶本は成親、語り本系は俊寛。最後に⑤のところは読み本系がともに康頼としているのに対して語り本系は西光として

いる。

以上を整理してみると大体次のような傾向が見られる。つまり読み本系では瓶子を倒してからその首を取るまでのやりとりが、成親と康頼の二人によってなされており、それに対して語り本系では成親、法皇、康頼、俊寛、西光の五人の行為として語られているのである。密議や酒宴の様子はそれを伝える史料もなく、もっぱら作者

の創作によるものと見て間違いないと思われるが、ここでわれわれは覚一本をはじめとした語り本系における作者の構想の一端を窺うことができる。すなわち、覚一本などがここで成親、法皇、康頼、俊寛、西光ら五人を登場させているのは、陰謀が露見した後の展開を念頭に置いての意識的な行為であつたのではなからうかと推測される。

周知のとおり、「鹿の谷」の陰謀は多田蔵人行綱の返り忠によって露見してしまうわけであるが、その密告の場面で「さて夫をば法皇もしろしめされたるか」と問う清盛に行綱は次のように答えている。

「子細にや及び候。成親卿の軍兵めされ候も、院宣とてこそめされ候へ。俊寛がとふるまうて、康頼がかう申て、西行がと申て」な(シ)どいふ事共、始よりありのま、にはさし過ていひちらし、「いとま申て」とて出にけり。

(巻第二・西光被斬)

「始めよりありのま、にはさし過ていひちらし」たとはいっているものの、「俊寛がとふるまうて、康頼がかう申て、西光がと申て」という記述からも明らかに酒宴の場面と照応しており、享受者としてその場面を喚起せしめている。そしてこの密告によって謀議の關係者が次々と捕えられ、作品は西光被斬、法皇の幽閉をめぐる清盛と重盛の葛藤、成親の配流と暗殺、康頼・俊寛の鬼界が鳥配流とい

うふうに関係者各個人の物語へと展開して行く。これは勿論語り本系に限ったことではない。しかしこれら陰謀事件の関連者がそれぞれ悲劇的な物語の主人公であり、その悲劇が外ならぬ「鹿の谷」の陰謀事件にその発端があったことから考えてみた時、覚一本をはじめとした語り本系は、法皇以下五人全員を酒宴の場に登場させてより活動的な役割を付与することによって、それぞれの悲劇との関係をより効果的なものにするということができるのであろう。またこれは、陰謀に加担した他の人物らに対する作者の処理態度を見ればより明確である。すなわち作者は、蓮浄以下の与力者たちに対しては「近江中将入道蓮浄佐渡国、山城守基兼伯耆国、式部大輔正綱播磨国、宗判官信房阿波国、新平判官資行は美作国とぞ聞えし」（巻第二・阿古屋之松）という簡単な記述で以て済ませているのである。「鹿の谷」の酒宴の演出には、少なくとも作者のこういう構想があったと思われる。

三

「鹿の谷」の酒宴の演出には作者のこういう構想があったということが分ったところで、今度はその酒宴の演出と成親像との関係について考えてみることにしよう。「鹿の谷」の平家打倒の陰謀が成親のつまらない欲念から端を発しており、作者はこれをきびしく批判していることは既に先述したとおりだが、その陰謀の夜の酒宴そのものに対しても作者の目はきびしい。そしてそのきびしい目は浄憲

を通じて現れている。かつて石母田正氏は重盛を「作者の思想の代弁者」と述べたが、ここでは浄憲が代弁者としての役割をしていると言つてよいだろう。山庄での酒宴に臨席した浄憲のいう「あさましさ」とは、「非分」の欲心に目がくらみ情勢を正しく判断する理性を欠如して「天下の大事」を引き起こしたこと、またそれによってやがて襲つて来るはずの身の破滅も自覚できず虚勢を張っていることに対する「あさましさ」である。

その「あさましさ」にいち早く気づいたのが行綱であったのである。彼は「そも内義支度はさまゝなりしかども、義勢ばかりでは此謀反かなふべうもみえざりしかば」と西八条に赴くのである。そもそもこの謀議は、作者も再三言っているようににはじめから実現可能性のない「よしなき謀叛」であった。酒宴で展開された即興猿楽は作者の創作とみてもいいと思われるが、それはたぶんその謀議の「よしなさ」を決定的に表そうとしたものであつたらう。そしてそのあさましい即興猿楽の火口となつた瓶子を倒した張本人がほかならぬ成親なのである。「新大納言けしきかはりて、さ(っ)とた、れけるが、御前に候ける瓶子をかり袖にかけて引たうされたりけるを」という表現から、落ち着きのない、軽率な人としての成親像を想像することはそれほど難しいことではない。このように成親の「あさましさ」が具体化されていくわけであるが、作者の成親に対する批判的態度は逮捕された後の叙述によりはつきりと現れている。行綱の密告によつて陰謀の参加者たちが次々と逮捕されるなかで、成親はその首謀者としてまっさきに捕らわれるわけであるが、そのあり

様を『平家物語』は次のように語っている。

太政入道まづ雑色をも(ツ)て、中御門烏丸の新大納言成親の許へ、「申合べき事あり。き(ツ)と立より給へ」との給ひつかはされたりければ、大納言我身の上とは露しらず、「あはれ、是は法皇の山攻らるべき事御結構あるを、申とゞめられんずるにこそ。御いきどおりふかけ也。いかにもかなふまじきものを」とて、ないきよげなる布衣たをやかにきなし、あざやかなる車により、侍三人めしぐして、雑色牛飼に至るまで、つねよりも引つくりはれたり。その最後とは後にこそおもひしられけれ。四八条ちかうな(ツ)てみ給へば、四五町に軍兵みち、たり。「あなおびた、し。何事やらん」と、むねうちさはぎ、車よりおり、門の内にさし入(ツ)て見給へば、内にも兵どもひまはざまもなうぞみちみちたる。中門の口におそろしげなる武士共あまた待うけて、大納言の左右の手をと(ツ)てひ(ツ)ぱり、「いましむべう候やらむ」と申。入道相国簾中より見出して、「有べうもなし」との給へば、武士共十四五人、前後左右に立ちこみ、縁の上にひきのぼせて、ひとま(なる)所にをしこめて(ツ)げり。大納言夢の心ちして、つや、ものも覚え給はず。

(巻第二一・西光被斬)

清盛の召喚の意図に対する勘違いもさることながら、それを最後とは知らず「ないきよげなる布衣たをやかにきなし、あざやかなる

車にのり、侍三人めしぐして、雑色牛飼に至るまで、つねよりも引つくり」って西八条に赴く成親の「あさましさ」を、作者は嘲笑うかのように描いている。

こうして囚われの身となった成親がいよいよ清盛の訊問を受ける。清盛のきびしい追求に対して成親は「ま(ツ)たくさる事候はず。人の讒言にてぞ候らん。よく、御尋候へ」とあくまでも陰謀の事実を否定する。これに対して清盛は「あなにくや。此うへをば何と陳ずべき」と西光の白状を顔に投げつけ、成親を庭に引きずり落して拷問にかける。重盛をはばかりた経遠・兼康が「いかさまにも御声のいづべう候」と耳打ち、それに応じて成親はみせかけの「二三ゑ三声」をおめくのである。

『平家物語』は以上のような訊問の光景を各人物の言動を中心にして克明に語っているが、これは「西光被斬」における西光のつた堂々とした態度と好対照をなしており、それによつて成親はいつそう卑下・矮小化されていくのである。そしてこういう卑下・矮小化は重盛との対面の場面にいたって頂点に達するといつてよいだろう。きびしい訊問のあと一部屋に監禁されていた成親が「さり共小松殿は思食はなたじ物を」と一墨の希望をかけていた重盛と対面し、「地獄にて罪人どもが地藏菩薩を見」るうれしさのなかで次のように言うのである。

何事にて候やらん。かゝるめにあひ候。さてわたらせ給へば、さり共とこそたのみまいらせ候へ。平治にも既謀せらるべきまで

候しが、御恩をも(ツ)て頸をつがれまいらせ、正二位の大納言にあが(ツ)て、歳すでに四十にあまり候。御恩こそ生々世々にも報じつくしがたう候へ。今度も同はからひなき命をたすけさせおはしませ。命だにいきて候はゞ、出家入道して高野粉河に閉籠り、一向後世菩提のつとめをいとなみ候はむ。

(巻第二・小教訓)

西光の白状によつて謀反はすでに明らかになつたわけだが、それでも成親は「何事にて候やらん、かゝるめにあひ候」としらを切るうとする。そして成親は「命だにいきて候はゞ……」と重盛にすがりつくのである。こうして成親は重盛の温情によつて斬首を免れ流罪に処せられるが、結局はその配流地で「酒に毒を入れてすゝめたりければ、かなはざりければ、岸の二丈ばかりありける下にひしをうへて、うへよりつきおとし奉れば、ひしにつらぬか(ツ)てうせ給ひぬ」という、作品における死の諸相からみる時、一番残酷な殺され方をしているのである。作品はこの「大納言死去」に続いて徳大寺実定がかりごとによつて自分の所望を遂げたことを伝え、それに較べて「新大納言も、かやうに賢きはからひをばし給はで、よしなき謀反おこりて、我身も亡、子息所従に至るまで、かゝるうき目をみせ給ふこそうたてけれ」(巻第二・徳大寺之沙汰)と成親を批判している。

以上作品においての成親像を見てきたが、成親は権力欲ゆゑに身を滅ぼしたあさましい人物として卑下・矮小化され、それは彼の死

の瞬間まで一貫していることが分る。ところで『平家物語』における成親像を考察する時、もう一つ考えなければならぬのがその子息の成経の存在である。成経の名が作品に初めて登場するのは次のような一節からである。

新大納言は我身のかくなるにつけても、子息丹波少将成経以下、おさなき人々、いかなるめにかあふらむと、おもひやるにもおぼつかなく、さばかりあつき六月に、装束だにもくつるげず、あつさもたへがたければ、むねせきあぐる心ちして、あせも涙もあらそひてぞながれける。

(巻第二・小教訓)

清盛邸での拷問に続く記述であるが、謀反が露見してその首謀者が自分の家族の安危を気づかうのは不自然とは言えないとしても、ここで「子息丹波少将成経以下」と成経の名をはつきりと示しているのは何を意味するのか。それは、成経物語ともいふべきものの存在を暗示しているものではなかつたらうか。次の章段が「少将乞請」であることもこのことを裏づけているといつてよいだろう。その成経に対して『平家物語』は次のように表している。

其夜は夜もすがら、康頼入道と二人、墓のまはりを行道して念仏申、明ぬればあたらしう壇つき、くぎぬきさせ、まへに仮屋つくり、七日七夜念仏申経書て、結願には大なる卒兜婆をた

て、「過去聖靈、出離生死、証大菩提」とかいて、年号年月の下には、「孝子成親」と書れたれば、しづ山がつの心なきも、子に過たる宝なしとて、泪をながし袖をしぼらぬはなかりけり。年去年来れ共、忘れがたきは撫育の昔の恩、夢の如く幻のごとし。尽がたきは恋慕のいまの涙也。三世十万の仏陀の聖衆もあはれみ給ひ、亡魂尊靈もいかにうれしとおほしけむ。

(巻第三・少将都帰)

治承二年九月鬼界島を出た成経は教盛の領の肥前の鹿瀬庄で年を越し、翌年正月下旬肥前を出発、二月十日頃備前の児島に到着、有木の別所を尋ね父の後世を弔い、三月十六日鳥羽の父の山莊すはま殿に立ち寄り父を偲ぶ。右の一節は有木の別所の父の墓を尋ねた時の叙述であるが、卒塔婆に書いたという「孝子成経」の言葉こそ作品における成経を端的に表している。「孝子」という語は、たとえば『平家物語全註釈』^⑩でいつているような「死んだ父母に対し、子が祭祀のときにいう語」という単純な意味を越えた、作者の心情の現れと見てもよいと思う。つまり「孝子成経」と書いたのは紛れもなく成経自身であるが、それは同時に成経に対する作者自身の心情がそのまま成経の行為として現れたものであろう。成経の孝子ぶりはたとえば「命のおしう候も、父を今一度見ばやと思ふ為也。大納言がきられ候はんにおいては、成経ともかひなき命をいきて何にかはし候べき」といって、教盛をして「子をば人のもつべかりける物かな」と感動せしめているところ(巻第二・少将乞請)や、また配

流の途中にも「よるひるたゞ仏の御名をのみ唱へて、父の事をぞ嘆れける」(巻第二・阿古屋之松)という記述にもよくあらわれているように、成経は徹底した孝子として作品に描かれているのである。

こうした孝子成経を通じて作者は、いままで非難の対象であった成親に対して同情・共感を示している。それは特に「少将都帰」で、成経の父の遺跡めぐりを抒情的・詠歎的叙述で一貫しながら成経の涙をちりばめ、享受者への憐憫の情をそそっているのである。成経の悲しみに同情し「泪をながし袖をしぼ」ったのは「しづ山がつの心なき」者だけではなく、作者も『平家物語』の享受者も同じ心境であったろう。「三世十万の仏陀の聖衆もあはれみ給ひ、亡魂尊靈もいかにうれしとおほしけむ」という一節はまことにこのことを指していると言えよう。成経が物語に描かれているとおり、孝子だったのかどうかはそれを伝える史料がないのでよく分らない。しかし、作者が成経を徹底した孝子に創りあげた背景には、成親という人間に対する同情と共感の意識があつたと思われる。

おわりに

『平家物語』には様々な人間群像が描かれている。そのなかには作者によって褒め称えられている人間もいれば、反対に否定的な描かれ方をしている人間もいる。成親はどちらかと言えば、後者に属する人物である。

それで本稿では、『平家物語』において否定的な側面で見られていく成親に焦点を当てながら「鹿谷事件」との関連をめぐって考えてみた。周知のとおり、鹿の谷の陰謀事件は実際に起った事件である。安元三年（一一七七）五月二十九日、多田藏人行綱の密告によって発覚し、成親をはじめ院の近臣たちが捕まって、それぞれ処罰されたのである。作者はその事件の首謀者である成親を権力の亡者として決して快く思わない。そして、作品を通して成親を卑下・矮小化することによって、きびしい批判を加えているのである。これはある意味で当り前のことであろう。

ところで、作品を綿密に読んでみると、成親を徹底的に悪人化されていくことに気づく。言い換えれば、きびしく批判しながらも、追いつめようとしないことである。ある意味では理解しようとする姿勢まで感じとれるのである。例えば、成経を通して成親への同情・共感もこういったものである。

『平家物語』には成親以外にも、決していいイメージとは言えない人間が多数登場する。作者はこれらの人間に対してもそれぞれ同情と共感をもって語ろうとする。それはたとえ、俊寛と有王、宗盛と清宗の関係などもこうした脈絡から解釈することができるのであろう。

注

(1) 『玉葉』・『吉記』・『兵範記』・『山槐記』・『愚管抄』などの史料に見える。

(2) これについて、早川厚一氏は『愚管抄』（日本古典文学大系本による）が、「鹿谷事件の因を成親一人に帰してはいないのは注目される」と述べている。その根拠として氏は、「ナノメナラズ御龍アリケル」（二四四頁）成親を初めとして、師仲西光・西景・康頼・俊寛等が、静憲法印の山荘へ、後白河院がお出になつた時に「ヤウヤウノ議ヲシケルト云事ノ聞エケル」と記すが、乱の原因を特に成親一人の私憤に結び付けてはいないと言われ、成親一人の私憤に結び付けて、「鹿谷」を描くのは、『平家物語』特有のあり方であると指摘しておられる。（『平家物語』の成立―鹿谷事件と二条・高倉両帝の造形について―）名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇 第二十四巻 第一号昭和六十二。

(3) 周知のとおり『平家物語』では謀議のため、集まった鹿の谷の山荘を「法勝寺ノ執行俊寛カ領也」（延慶本一三七頁）とするが、『愚管抄』では静賢法印の山荘となっている。これについて村井康彦氏は、「山荘そのものはおそらく同一で、前執行静憲の山荘をその後（すぐ後かは不詳）に任じられた俊寛が受け継いだものと考えてよいだろう」と述べている。（『平家物語の世界』徳間書店、昭和五十四）。しかし『愚管抄』の記事が正しいとするならば、山荘を俊寛のものとしたのは、俊寛を謀議の場所の提供者として位置づけ、それによって赦免から除外されることを合理化しようとした作者の作為によるものとみるべきであろうか。

(4) 石母田正『平家物語』岩波書店、昭和五十五、一九頁―二三頁。

(5) 岡見正雄『愚管抄』新日本古典文学大系（岩波書店、平成四、二四四頁）。

(6) 北原保雄他編『延慶本平家物語』上、勉誠社、平成二、六九頁。

(7) 『源平盛衰記』では、浄憲の諫言を受け入れて法皇の御幸がなされなかったかことになっている。

(8) 前掲書（注4）の二四四頁。

(9) 後白河院の近臣たちのなかで成親と西光が、平家打倒の急先鋒として振舞ったことは確かである。例えば、彼らの逮捕を記す『玉葉』の安元三年六月一日条を見れば明らかである。「辰刻、

人伝云、今噴、入道相国坐^二八条亭^一、召^二取師光法師^一（法名西光、法皇第一近臣也、加賀守師高父）、禁^二固之^一、被^レ問^二年来之間所積之凶惡事^一、並今度配^二流明雲^一、及讒^二、邪万人於法皇^一、如此了間、非常不敵事等云々、又今日招^二寄成親卿^一、同以禁錮、殆及^二面縛^一云々、（『玉葉』）。

(10) 富倉徳次郎『平家物語全註釈』上巻、角川書店、昭和四十四、四三三頁。

* 引用した『平家物語』の本文は、日本古典文学大系『平家物語』上下二巻（岩波書店、昭和三十五）を使用した。